武家名目抄稿

稱呼部

三十七

和書門
二五二〇六 類 號
七七 函
七八 架
四五六四四九 冊

内閣文庫
和書
二五二〇六 類 號
四五六 冊
一五三 函
一一 架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457 (132)
函號 153 275

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第三十七冊

稱呼部二十目録

御形代

矢代

代官

一老

職

當職

国立公文書館
National Archives of Japan

前職
職衆
下知司
役者
役人
沙汰人
甲乙人
訴人

證人
論人
方人
雜人
人質
降人
預人
落人

国立公文書館
National Archives of Japan

欠落人
下手人
川立

武家名目抄稿第三十七冊

稱呼部二十

御形代

文録清談云細川勝元淀鯉料理条細川右京兆勝元ハ庖厨ニ風流ヲツクサレ常ニ珍膳ヲ嗜マレケルトカヤ其當職ノ管領ナレハ公方御譜代ノ侍近習外様ノ大名此人ヲ崇敬シテ音物ヲ運ヒ送ルヿ櫛ノ歯ヲ引カ如

シ誠ニ天下ノ御形代ノ人ナレハ奔走スルモ理也

矢代

國府基戦記云古ヘ義経や一海のうらに合戦ス佐藤次信御矢代ト立リ迯ハ大変くろを給ひ〻る武蔵次信ゝ五ゝひを三度迄引ひて終ハ死ぬ〳〵ふりてたゝめいとにはりとそう巻をたまたる

代官

明徳記云播磨守満幸ト申ハ山名ノ左京大夫時氏ニハ孫右衛門佐師義ノ末子也舍兄讃岐守義幸病氣ノ後ハ彼代官トシテ在京シ一方ノ家督ニテ有ケルカ、、内少輔時昭以下退治ノ後ハ四ケ、、護職ヲ持テ權勢氏族ニ越エタリ

季瓊日録云永享十一年五月廿七日喜隱

斬御成於昭堂御焼香為御代官而詣清水
八幡宮云々
又云永享十一年十一月十一日光院御成
管領御相伴太子堂本尊入寺持又参謝
當寮即披露之自来十八日至廿四日為御
代官可請清和院之由蒙命
賀越闘諍記云（公方様越州御下向條）越前國ニ御越
有テ朝倉左衛門督義景ヲ御頼有テ敦賀
郡ヘ御座シケレハ則義景代官トシテ同
名孫八郎景鏡御礼ニソ参シケル御感有
テ式部大輔ニナル
會津四家合考云（白河義親没落條）義親一族ナリ
シ中島上野餘議モナク義親ニ異見スル
ハ秀吉卿鎮西南海北陸ニ威ヲ振レシコ
ト此五六年以来世上ノ風聞ハ聞召レタ
ル御事ニテ候（中略）不レ恐其御代官ニ罷上リ

能クキ様ニ申叶候ハント心底ニ實ヲ含
ンテ言外ニ理ヲ盡シ異見シタリケレト
モ云々

播州佐用軍記云羽柴秀吉卿播磨ヘ下給條　天正五年
丁丑七月上旬播磨ノ國ヘハ信長公ノ代
官トシテ羽柴秀吉卿其勢一萬八千餘騎
ニテ府中ノ城主小寺カ舘エイリ給フ

一老

三百九十七ノ二ウ

親房卿被贈結城状云何況武家之故實辺
鄙之成敗万而不得一理諸人不受皆所自
顧也殺此身不可塞其謗矣但為先朝之一
老具蒙慇懃之顧命

甲陽軍鑑末書云天正九年二月伊豆表ヘ
勝頼公御馬ヲ出サルヽ氏政三万餘ノ人
数ニ而出向勝頼公典厩ニ仰ラレ氏政ヘ
合戦ヲシカケヨトアリ典厩長閑分別ニ

而一戦ナシ其時御一戦候ハヽ勝頼公御
勝利ニ而有ヘク一家老ノ松田尾張守子
勝頼公方ニナル之ヘ松田カ勢出マシク
候然共氏政衆三島ノ小川ヲ前ニ當弓鉄
炮ヲ際限ナク五重計ニ備然モ總勢下敷
合戦ヲ持テ居タル見テ止ラルヽ也
武林雑話云荒業平均乃後豊前小ヲ十或万
石伴領仕ル時六子石とゝ世四郎右衛門つと

職

名付一老小右定公儀内儀共ニ人小打任せ石
田治部少輔ハの加藤茂の國拝領仕ル而ニ
百万子石とらを家康公御目見仕ゝを後後
ち任ル
武藤叢話云弥平次三兵後ハ四智日向守一老臣と
成ル智左ゝ秀俊と号武子の大將小成り
光秀先手を勤ゝ名類ル形

三百八ウ

平治物語云頼朝平家ヲ亡シ天下ヲ治テ
文治始諸國ニ守護ヲ居テアラユル所ノ
莊園郷保ニ地頭ヲ補シテ武士ノ輩ヲ勇
メ廢タル家ヲ起シ絶タル跡ヲ繼テ武家
棟梁トナリ征夷將軍ノ院宣ヲ蒙レリ卯
ハ是東方三支ノ中ノ正方トシテ仲春ヲ
ツカサトル柳ハ卯ノ木也春ノ陽氣ヲ得
テ天道惠ノ眉ヲ開キ營繁ク栄レハ柳営
ノ職ニハ卯年ノ人ハ實ニ便有ケル者哉
甲陽軍鑑云高坂彈正存生の時宮方の諸事
人科寄醫なさるゝ時 陣を分ける小
川て出る事あり 法師人 ゆうそ中 百人 小人
或新庄なんとの分く双方亦市陣中に
至迄て目付横目庄改をく此武者奉行の藤
原 上野 是も此中百人小人市乃宮庄も弱る
さて又信玄我玉領の百姓、諸役不可なく惠

儀あるを以て地位に位する人多し
活花かをハ大形の科にて中野に至り出り少く
是も此職にあらくへくに
又、古方小身長崎家別系 或時馬場英治吉信氏人
吉にうひ陪臣なる何を分別と及申すする
細ハ職を持なるさこのさを以ハ相をよゝ相
を為らいふも為些やそうある人内
日さくとおもへ、、、、、、、、陪の

あるる人小職を作分る事ハ不思議と申
事我おをうかがさすを名さなるて
浩白氏系英治原何中なるぬを知仕事や絃
といへるも此人を事ふかををいを術代境、
武士原ハ用るく系として事りを工ら陪よ
を扱皆二三ヶ月を職空を中を以事英治
原、、、事ハ理、、、、、、、、、、、、
、、信を公ハ工夫不淺のへいこそめ。此

太閤記云秀吉を後一世の長公主の為に話し條斯て仰けるは
かやうなる高職をいまだ旧功に依らず
乃度男子乃至不識也去年旧臣小言其
始則豈論新旧乎

當職

卧雲日件録云享徳癸酉二月十七日室渚
雲章来話中略慶雲荘今在建仁長慶院仲芳
真子也又記雲章話泉州太守臣有曰久枝

者、、為泉州副守力辞、、為僧渡唐去
今泉守品位之初諫主令不受州中寺社之
賀銭者四百銭貫也予曰叶今亦有、、賢
者乎傳聞今月七日當職射狗會自丹波
又云長録三年三月四日喚智瑞行者来中略
瑞又曰當職多我出雲守先是齊日公府役
帰時街頭聞呼呼声問之則男子好衣裳風
金粧ス者三人、、、衣服者即捉三人誅

之

年中恒例記云正月一日七日十五日二十日五ヶ
日大名以下上様（カミサマ）へ被申事當職一人ヲ
御前へ被案ヲ御盃頂戴之云々
又云二月一日一献對面次第出座し御対
面供在中次第二月一日愛領ヲ中入ヲ以て當職
一人御前へ案ヲ以て為座也云々

前職

豊記抄云三職ハ上ヲ當職次ヲ前職ヲ次ニ
為座ヲ三愛領并ニ此分ハ當職ハ正刺初評
定始ハ時一人ニ為座引付底事ハもうら
うらニ為座

職衆

甲陽軍鑑云右の增城源八ヲ墨絵一ヶ三
年月河中島合戦より後御小姓ヲ已ヲ事ヲ
て指ヲ刻侍衆の始ヲ座悪次郎と中若膳番

を仕ると又對変有て終実否窺まゝに織
大城ゟ遣しの事なれとも信玄仰出し小
旗本内侍小西に織央をとらせ遣て下事な
為仕遣られて西方代を出して出らをよせ
工をして敵方より彼者をいゝ織方と樣目
共人方所四人彼指をへ以播高砂庭より織央
をとり堀城被責ゟ事ゟ敗
下知司

救斗日記云丹波家所ゟ去月廿二日別所
手配之條
長治荒木村重等ニ御下知アリテ摂州播
州ニテ三手合セノ御武畧ヲ立テレ平林
右馬助秀家伏谷美濃守氏信三田肥後守
綱氏ヲ御目代下知司トシテ宗徒ノ旗頭
衆ヲ副テレテ将軍池ノ上ノ陣ヲ夜討ニ
シ云々

役者

老衣故実云沛成左右ハ左右供流を流産家
警事警廣院屋根瓦代藤田屋屋ハ大師酒あ
ヲて還所頃も不知此元人小あ人のきて祝られ
ヒけを公方様ら川そ（ヒ）ヒ（ヒ）を祝やらせられ
るをより一大事の役者ヲ川ヒ中うまいて
出ヲこいをを

六 甲陽軍鑑云 山本勘介ヲ史 花陸鹿介義系 勝信ヲ金言城伝ら
ヲを工方の徒人云寄鑒なを徒人のあや

きりなを大物ヒやや老ヒやまを家老あやまを家
諸伝過い下ヒ過をを作られ又ヒヒ
東遷基業云勝頼ヲまを狩ヒ因より家勢を
ヒヲ為ヒヒ以ヒ月廿一日の曙不近ヒと
徒を立を中何も馬を大将と役者ヒ計七八
人ヲて殘ヲ士ハヲハ後ふ率せ皆下ヲ立ヒ検を
ヒヲ一徒をより小熙不ヲ合戦を始ヲ事を

天文年信長公ゟ陣所ゟ大角二ツ云々被
ゟ下ル

役人

花営三代記云應永廿九年正月十七日於
殿中寢殿南向有的始三番三弓也注別紙
厥後御所様御方ノ御所様被遊也管領諸
大名両御所江御太刀進上御方衆御方へ
太刀進上候役人御太刀被下則進上云々

沙汰人

應別抽案云厨院飯云右遠者課抄法人号
地下目録反抄以下文書例納法注文為可
知右也
又云地下之事或縁失或失墜猶孔子抄
法人号依様申延引之条恐入
季瓊日録云寛正四年八月五日等持院領
宮津庄三沙汰人緩急仍可被成敗罪遇之

御奉書之事即命二于飯尾左衛門大夫也

甲乙人

保元物語云其折節平兵衛尉家貞兵衛錄倉本半（三十、九十九ウ）

（本作）左衛門鎮西ヨリ大勢ニテ上洛シケルカ

郎等共淀川尻ニ充満シケレハ時分悪カ

リナン暫其程ヲ過サントタメラヒケル

程ニ重病ヲ受テ萬死一生也免角シテ助

リケレ共（自萬死一生至此鎌倉本不載）起居モ合期セサ

レハ或浴室ニ下リ療治ヲ加ヘケルニオ

リ合タル甲乙人等究怖シ人間トハ見ヘ

スト怖オノ〳〵怪ヲナセリ

杉平記云永禄五年乃秋の末三河し住人菅

沼藤十郎定盛をいつ〳〵云狐のあふ代来

れ上云寺へ切てもみ城かゝて亀甚四郎を五て

堀へ捨る此ちい三河國の三ケ寺代院衆乃其

一史殘の二ケ寺代坊達寄合て談合一者

[illegible]氏寺い尚ほ〻年ちかく関山上人を此
方久家ふ入ら地やか孫乃甲乙人のろうせき
すくさ不にあらさ以業れ為たいまちむ下ゝて
茂沼う不ら行ち民を僅〻茂沼う内の者
共を折ふき雑あく〻あ[illegible]ま返〻て恨う茂
沼ちく〻いう甲喧嘩致紙〻けまく〻不仆
此内酒井雅楽助小中[illegible]拙井吟う候を以
中巻迄ハ其使をも甲ら間敷旨致きさ

しめ〻酒井雅乗助を第人毎人ふ乙仰付
寺社根籠乃者ともいまちめたまへ云々

訴人

吾妻鏡云弘長元年三月五日引付沙汰不
事行之由訴人等愁訴之趣達上聞之間今
日有評議向後無懈緩之儀早速可申沙汰
也於徒拘持奉行人等者頭人就注申可被
處重科之旨被觸仰引付云々

太平記云（公家一統政道條）或ハ自内奏訴人蒙勅
許ヲ決断所ニテ論人ニ理ヲ被付又決断
所ニテ本主給安堵内奏ヨリ其地ヲ別人
ハ恩賞ニ被行

證人

平家物語云行綱ありしひるの事中出て流
人よりとうの人ぶんとおぼしき人も
を給はる稿一ちはやの社の家人ちかて

名つかへを逃たる者なり

亦藤親基記云文正元年四月十六日吉樹下順理
右文教害事於殿中吳見有之既殺害之旨流
人分明之上者於張本人者為社家為被討
罰到社司給之可云旨吉田返事中之

伊達日記云修理存候ハ米澤へ御奉公申
候ハ彼人質共相捨可申儀難儀ニ候間證
人替可申ト存備前家老ノ子中沢九郎四

郎大内新八郎大河内九郎吉三人へ状ヲ
越唯今追鳥時分ニテ候間羅越候へト申
ニ付何モ若者共ニテ以後ノ分別モナク
八月五日之晩苏松田へ羅越云々
蒲生氏郷記云永禄十一年氏郷十三歳鶴
千代ト申時信長公得父蒲生兵衛大夫為
證人岐阜得被相越於御前毎度武篇雑談
有之云々

新田中良家傳記ニ成繁公内婚子中良六郎國
繁公後雅楽助又信法号ハ代天正十二年ニ小
田原北條氏政計策ヲ以テ於厩橋法人ハ小多仁國
繁公ハ代ヲ以ハ成せらるる

論人

太平記云公家一統或ハ自内奏訴人蒙勅
政道條
許ヲ決断所ニテ論人ニ理ヲ被付又決断
所ニテ本主給安堵内奏ヨリ其地ヲ別人

ノ恩賞ニ被行

方人

吾妻鏡云治承四年九月七日丙辰爰平家方人有笠原平五頼直者今日相具軍士擬襲木曽木曽方人村山七郎義直并栗田寺別當大法師範覺等聞此事相逢于當國市原決勝負云々

又云文治三年二月九日辛巳有大夫屬定康関東之功士也彼近江國領所平家在世之時者称源家方人被収公滅亡今又守護定綱為兵粮米點定之依之企参上募申有勞之間停止旁狼籍如元可領掌之趣今日被仰下云々

又云文治三年十二月十日丁丑橋ノ為茂蒙免許為北條殿計賜富士郡田所職是父遠茂者為平家方人治承四年奉射二品仍

日来為囚人云々

又云承元三年十二月十一日辛未美作藏（十七、十五ウ）人朝親與小鹿嶋橘左衛門尉公業欲致楚忽合戦相互縁者競馳三浦一族稱方人来加公業之許云々

雑人

太平記云新田義貞謀叛條

左近太夫入道二十萬餘騎ヲ差副テ京都ヘ上セ幾内西國ノ乱ヲ可静トテ武藏上野安房上總常陸下野六箇國ノ勢ヲソ被催ケル其兵粮ノ為ニトテ近國ノ庄園ニ臨時ノ夫役ヲ被懸ケル中ニモ新田ノ庄世良田ニハ有德ノ者多シトテ出雲ノ从親連、沼彦四郎入道ヲ使ニテ六萬貫ヲ五日カ中ニ可沙汰ト堅ク下知セラレケレハ使先彼所ニ莅テ大勢ヲ庄家ニ放シ

入テ譴責スル事法ニ過タリ新田義貞是ヲ聞給テ我館ノ辺ヲ雑人ノ馬啼ノ二懸サセツル事コソ返々モ無念ナレ爭カ斥見可ㇾ怵トテ数多ノ人勢ヲ差向ラレテ両使ヲ忽生取テ出雲ノ从ヲハ誠ノ置キ黒沼入道、、、ヲ切テ同日ノ暮程ニ世良田ノ里ノ中ニ、被ㇾ懸ケル

又云公家一統政道條、文覩工人ハ硫黄カ嶋ヨリ上洛シ忠圓僧正ハ越後國ヨリ被ㇾ帰洛摠メ此君笠置ヘ落サセ玉シ刻解官停ㇾ任セラレシ人々死罪流刑ニ逢シ其子孫此彼ヨリ被ㇾ召出一旦ニ懐ヲ開ケリサレハ旧来誇ㇾ武威無本所ヲ權門高家ノ武士共イツシカ成諸庭奉公人ト或ハ走輕ㇾ軒香車後或跪青侍格勤前世ノ盛衰時ノ轉変歎ニ叶ハス習トハ知ナカラ今ノ如ニテ公

家一統ノ天下ナラハ諸國ノ地頭御家人
ハ皆奴婢雑人ノ如ニテ有ヘシ哀何ナル
不思議モ出来テ武家執四海權世中ニ又
成カシト思フ人ノミ多カリケリ
愈制法来云同法不者永代所券文諸手紙放
券奴婢雑人券契員累銘文号孫實紙所
ヘ
鹿島治乱記云捨鹿島府中ヘ可有歸城、

内々ノ用意宿老共雖奉諫無御兼引依之
島崎ヘ告来左衛門尉返事ニ今如何共難
計可任城主之心使者ヲ飯シ竊招部下之
人々義幹之乱放難制止所今通幹飯十府
中内外ノ沙汰噸ハ東ヨリ附置忍者共早
刻可告義幹願所ト卒手勢夜中可寄来外
ニ疎遠會釋待此時節鹿島ヨリ雑人小荷
駄可運舟津其紛ニ我卒手勢可、鹿島要

害

松原自休手録云向若州丹羽明知人質ハ取ヌレトモ與朝倉一揆トモ差塞道危ク見ヘケレハ分遣家康ノ勢追拂敵是モヽ入杓木今津船木ノ山々ニ一揆取上テ上関声雖發矢石為差事モ不出来所々嶮難ノツマリツマリニテ雑人モ不取落上洛セラル

人質

宮町殿物語云ケ様前号京都より一戦ま打まけ〳〵より元屋せ〳〵人〳〵相待して心留ヲさせ〳〵ハ塙津の入道も中をそんと思ひ元無沢を人質にい〳〵れて行ても熟止ラさく ていふふて盗いるさん事を案しめらるゝ

江濃記云日根野備中同弥吉二人屏風ノ影ヨリ跳リ出テ兼常ノ二尺三寸ヌケハ

玉ヶ所ル計ナルヲヌキ孫四郎ヲ二太刀ニ
切卧ケレハ隼人ト弥吉ハ二色右兵衛佐
ヲ切タヲス此由父道三聞テ大ニ驚キ馳
カヘリ貝ヲ吹テ人数ヲ集メ四方ノ町ノ
末ヨリ火ヲカケ放火シテ稲葉山ノ城ヲ
ハタカ城ニナシ川ヲ打越シ山方ト云山
中ニ引篭リ父子ノ合戦初マリケル國中
ノ人質ハ新九郎方ニ有レハ皆新九郎方
ニ馳集ル

中國治乱記云石見ノ吉見正頼ハ此合戰
ニ義長ニ打負テ和談ニナリ降参シテ息
男亀王丸ヲ人質ニ出シケルヲ山口ノ福
井ト申處ニ置

高國記云大永八年正月朝倉太郎左衛門
ト三好筑前守和談ノ曖(アツカイ)アリ細川双方合
點アリ正月廿八日互ニ人質トリカハシ

ケルニ三好神五郎政長ト抑本一味シテ
和談ヲ破リ筑前守ヲ背テ堺エ下リ筑前
守事ヲ色々談言申シケル
大友記云（龍造寺山城謀叛之條）隆信モサナカラ心
元ナクヤ思ヒ給ヘ、ヘ、ヘヲコヒテ質
人ニ龍造寺豊前守ヲ出ス宗観シテ人召
レ永禄十二年三月廿日ニ豊州ヘ歸陣也
三好家成立記云久米安藝守云先軍ノ手
初ニ一ノ宮長門守ヲ打取渠カ妻子ヲ生
捕人質ニメ實休ヲ談合ノ其夜々討ソシ
タリケル一ノ宮カ臣ニ木村肥前守ト云
者一人供シテ一ノ宮ハ落タリ妻子ハ則
安藝守生捕クリ
（三好記三十六ノ）
赤松記云うくて浦上二ヶ國ハ勢を催し享
禄三年若植の小供中既に播磨國為藝ふ
をそそのの伊丹ハ城を攻落して悉く亡ぼ

まうてこゝいたりてまた阿波殿に向ふ
まうへ隣陣を引ける処ふかき屏風折回し阿波殿より
内通ありし此時秋の頃淀川をはさみてたゝかひあり調略
をもて敵へ人質を多取返後卷うちの敗と定
まり西むきに淀川をへだてゝ小谷城と被
寄しかは信長はこれを聞給へり
赤松（三百九十三ページ）再興記云享録四年三月廿五日細川
讃岐守政之卒八千人著堰津矣公方ト晴

元ト八千餘ヲ、将給テ御陣ヲ召ル三好一
万五千人ニテ天王寺ヘ取掛矢軍ヲ始ム
此時赤松政村晴元三好ニ内通シテ被渡
人質畢
阿弓将爾紀ヲ信長ニ好山城ヲ入道矣岩小阿
波國ヲ多作付ふり矣岩数多殺ヲ阿弓ヘ
下ヲ付れてさ紀ヲ元秋小隨ヒ阿弓ヘ古侍共
又矣岩小屬シけヲ元親多の云ともふけし

て池内肥前守殿中三郎左衛門尉を
人質ふとる夷山は吳田右衛門尉左衛
門尉の東川左右
衛門尉和泉守うるを人質ふとる云々
永禄記云信長彼和山に七ヶ道留し此人
沼路次し義人質を彼地之ヶ敵公
方根津縁ふ信長使節を添申されの年
をにおゝゝハ津思義にうと仰しられ
ゝいつも津信あゝ此上ハ外に及

ん事ハ遠ざまて九月七日に公方根
ハ嶋を発申江州を対果ハ遠をうを
上ら右ヶ中へ尾張し軍を出つ
九月七日ふうちとて軍尾了ヶ陣を
ふ地

敷州軍記云木造家既及叛心國司家大憤
欲攻伐木造先以拓植三郎左衛門之人質
害之九歳息女母子俱奪捕之木田方使其

家士中西甚太夫殺之下人往彼宿所誑連
行之時早悟此討其容貌美麗如玉殊利根
發明也向母流泪告別曰於泉下必有相見
云ニ見聞諸人為之酸鼻下人員之到木造
近辺雲出川端甚太夫捕之以縄縊殺刺大
木串向木造城掛磔不知東西之幼女其殘
酷誠堪憐其後沢秋山以下南方諸將囲木
造伐之城矣海津喜三為鉄炮名人為渠寄
手多蒙傷秋山家士坂甚四郎以数多戰死
矣當時鉄炮用不多世上
播州佐用軍記云（羽柴秀吉御播磨ヘ下給條）小寺一身
之ヲ覺ニヤ有ケン高孝父子其外之家老
ヲ聚ノ相談ヲ以テ當時信長公ノ武威ヲ
聞キ傳ヘ歸服仕ラント決定シテ（中略）御公
達ノ御中一人大將トシ播州ヘ下シ給ヘ
此方ヨリモ人質トシテ一子ヲ可奉ト申

テ潛ニ岐阜ヘ遣ケル

安土日記云明智十兵衛丹羽五郎左衛門

両人若州ヘ被差遣武藤上野人質取候テ

可レ参之旨御諚候則武藤上野母ヲ人質ト

シテ召置

惟任征伐記云（従毛利家望有條）分國之中備中備

後伯耆出雲石見以上五ヶ國渡進添誓詞

出人質可レ續二御旗一之由再三申來

甲陽軍鑑末書云懸川ノ城御順見遊シソ

レヨリ久野ノ城御巡見被レ成信州伊奈ヘ

御馬ヲヨセラレ高遠ニ道遥軒留主ニ被

仰付氏政ヨリノ人質兄弟ノ番ヲウヘノ

原加藤ニ堅仕候ヘト有テ北條方ヘノ境

目ニ指置ルヽ也

末森記云成政娘二人有レ之一人ハ秀吉公

ヘ人質ニ出シ方カレ上方ニアリ

大閤記云蜂須賀小六賀治田年人佐藤孫
百騎斗を引五六百人此内弓鉄炮あるも
せり此大将を大炊助也者車付を楯岩を
仮人をお定め案内者三人を内人。賀の為と
やおもひ一人一人を止り此を敵陣よ
多ゐたるを方城案内者をもて助
おいんと茂右衛門は何ものあら
止り小者梨

柴田退治記云池田紀伊守之助蜂屋伯耆
守頼隆其外引卒諸國之軍兵都合三万余
騎凌大風分深雪至岐阜押寄國中之古徒
或加追罰或任降参不経日而成一國一城
信孝惨之偏嘆慕和與之儀而信忠御若君
添信孝老母息女為人質出之
聚楽物語云毛利藤吉城中の大将清水兄
弟又蘭丸より加勢に入毎日三人以上五人ゟ

さらせ法華を無用者と称いい、足利方国の
中俣中俣坂伯耆守書状見ヶ国を海中
へ夢ふ人志ちを出し一族とて志ろ付志ろ
へ、きぞの坊心しまて大将の人の首実検あり
新田中良家傳記云足利の長尾但馬守嘉安
ハ子有し家を譲中ゝ男子云に依て成繁
公へ中入中略長尾京長是新ゝ三九郎を若子
ふ仕家中招し中に付て長ゝて新田家中資
三男多く有し方云三九郎に附ゝて上進ゝ来
を方ゝ知り是り了ゝ中ゝ浅く契約成繁
ゝ自然云九郎長を人質に云ゝて新田一ゝ切
敵一ゝそ迫りの侍共一所ゝ了ゝ来三九郎共ふ
対ゝ切死ふ了敵ゝ多ゝ家中侍共ふ仕付ゝ
東遷基業云織田信秀城を築て固守ふ適ゝ
子信長安祥に接ゝ是勝ふ対ゝ四面に敵を受
て危ゝ一ゝ信長ふ今川義元へ援兵・城ゝ

義元許諾して後遠乃方を奈し敗〻と乃
をまて人。饗を出さるへきよしを申越されい
廣忠公三ヶ日を始ハすして神君を賞と
義元へ送ル

愚耳舊聽記云 大光寺 遠乃方 尾張新屋浅瀬石
此三人も大光寺乃旗下にして いつれも遠乃方へ
ゝ通ひける志ろ不小浅瀬石 大和方よ
り小笠原伊勢守へ申越しなりいきたの長女婢

安藝守方へ申うけたくり迎に同人よりおゝてき
う条をといとまやうに申越しなりこれも伊
勢守ふおもひなりい大和心中豊光寺を恨う
せんるの妻よ敵方乃娘を望む事差人ならふ
せんとのことかり事なるへきを上一身に覚悟
まて是非を極めかるき事と乃岩し大和方より
それ〻娘をもらん中為旨申越し一条ふかか
さき事まそめなりに成ふと為ハ中上りれとる

信振ゆめ〳〵ゆゑハ計策ヲ中城ニ共ニ謀ル事
ふゝ細ゆゑ間敷ゆゑ[illegible]
被ゝ[illegible]ニ陽義なるゆゑ[illegible]
心を通ゝ[illegible]上ニ[illegible]
去る也とゝ返事ハ[illegible]
備前農家河本氏蔵永禄十三年下知状ニ
称津紀伊守ヲ同名監物ヲ立河玄蕃等為人
質ヲ地上城ニ向後為代可勤軍役ト云ヘ三

伊達日記ノ次ニ

天正記云侍中者城条
もゝけようえもり
条ニ侍ニ毛利国
義人質せい一清
取ゝ[illegible]もゝけの
陣をたゝら山毛利
元ハ心静ニ[illegible]
同六日の[illegible]
中ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人ニ[illegible]
伊達日記云今度ハ弥四本松中ノ城主ト
人質トリ被申候ニ付青木修理モ新八郎
ト申十六ニ成候弟ニ此比ノ青木掃部其
比ハ五ツニ成子ヲ指添小濱へ人質被相
渡申候云々
家忠日記抄云天正十年十月廿九日氏直ト
[illegible]事石川鶴ノ郡北方渡ニ申ス人質酒井

小西郎氏方ヨリ若ス敵ヨリ大道ヲ山角越ヲ
奥羽永慶軍記云（三ノ本）和賀山北藤倉合戦條　和賀諸頭是
ヲ聞テ此境ヲ爭フ事数箇年ナリトイヘ
トモ遂ニ不破不被破上ハ和賀山北ノ鬱
憤モ有ヘカラス是ヲ幸ニシテ和睦セハ
ヤト内議一決シテ其趣ヲ云遣ス山北モ
願フ所ナレハ互ノ生捕ヲ人質ト定メソ
ノ翌日両方ノ大将五人宛半途ニシテ出
逢對面式代シテソ歸リケル
又云（八ノ本）青木捕人質條　苅松田領城主青木修理ト云
者米沢ニ降シ候ハヽ内通スサレトモ
大内備前守武略ニ長シタル兵ニテ米沢
ヲ背キシ以来田村境四本松領ノ城主ヨ
リ人質ヲ取テ置シ事ナレハ青木修理モ
舎弟新八郎嫡子掃部人質トシテ備前守
ニ捕レヌレハ如何セシト案頃ヒケルカ

才覺ヲ以人質ノ代リヲ取ントモ思案ヲ運シケルハ備前守カ家臣ノ子中沢九郎四郎大内新八郎大河内次郎吉トテ三人ノ若者ノ在ケルヲ人質ニ取テ米沢ノ味方トナランニ殺害スル事ナルヘカラストト思ヒケレハ先カノ三人カ方ヘ使ヲ以云送リケルヤウハ今程苅田松近辺小鷹狩最中ナレハ速ニ此地ニ来リ狩シテ慰シ

給ヘカシト云遣ケリ

當代記云慶長十九年九月廿七日於大坂自秀頼公片桐市正可有殺害トテ被召ケレトモ号煩不参此密儀ヲ市正ヘ告知スル族有之カト云々則大野修理織田左門有楽以下以人数押寄処ニ市正モ令覚悟男其上字主膳相籠問無左右難詠戮依之自修理方取人質市正同主膳下屋敷ヘ相退

四十四ウ

玉露兼云慶長十九年十二月四日吉野ノ
奥北山熊野山史等年貢ヲ抑留スヘキタ
メ少々一揆ヲ發シ山中ニ引籠ノ由大御
所ノ御耳ニ立ツ依テ其近辺ノ御代官ニ
仰セ付ラレ人質ヲ取ヘキ由仰セ付ラル
四 数井日記云丹波家所々先早々使ヲ進上
遠忍者係
候近日将軍様并ニ羽柴殿ヘ名代ノ使者
ヲ奉ルヘク候并ニ輝元ヲ初メ宗徒ノ旗

頭トモノ人質ヲモ一所ニ奉ルヘク候云
々

一 武藩叢話云真田左衛門佐信幸夏陳ニ
五月六日誉田口ヘ張出ス伊達正宗と共ニ合戦
政宗先鋒攻来度近誉田ヘ退迄ニ手柄を振
ひ中ゝ討ル子息左馬助信隆十八歳にて高名を
高股ニ疵を蒙る翌七日ハ合戦ニ出ル志田左
つ作秀頼ニ御馬の出る事延引ニ成る左伯兼

大助と人。賞ス本也一入ノ真跡ニテ左ノ通ノ

作討死ス四十六歳也

松原自休手録云十九日常高院来若狭守

陣営右両人會彼處従城中曰残本丸埋二

三ノ堀有樂修理可出人質毋公ノ被出難

叶然上ハ従両公古新侍不可有異儀之可

賜誓紙云々依之和睦調畢

降人

奥州後三年記云義ふよ光將軍に申て曰はく

てをはりの降人はなはだ有古今乃例なり

るを武ゑ一人あるふの頭をきるる事を

ふいうとふよ義光ふ用ゐ給ひて

ふ中り降人とふを鞭の場をのうまれ人乃ま

ふうらをして後ふ皆はくひて首を乃へてまい

るあり不謂宗任当あり武衡いまかひの場る

いまとをふをまつてみたりうけ此時こいり

[illegible]

小斬つ

陸奥話記云獻貞任重任経清首三級京都

為壮觀車撃人摩肩（子細注別紙也）先是獻首使者

卒貞任従者降人也

吾妻鏡云治承四年十月廿三日壬寅著于

相模國府給始被行勲功賞（中略）大庭三郎景

親遂以為降人参此所即被召預上總權介

廣常云々

太平記云（大塔宮熊野落條）四方ノ山々ニ関ヲ居

路ヲ切塞テ用心密シクソ見ヘタリケル

是モ猶大儀ノ計略難叶トテ叔父竹原八

郎入道ニ此由ヲ語ケレハ頓テ戸野カ語

ヒニ隨テ我館ヘ宮ヲ入進ラセ無二ノ氣

色ニ見ヘケレハ御心安ク思召テ此ニ半

年計御座有ケル程ニ人ニ被見知シト被
思食ケル御支度ニ御還俗ノ體ニ成セ給
ケレハ竹原八郎入道カ息女ヲ夜ノヲト
ニ被召テ御覧ニ異他ナリサテコソ家主
ノ入道モ彌志ヲ傾テ近辺ノ郷民共モ次
第ニ帰伏申タル由ニテ却テ武家ヲハ褊
シケリ去程ニ熊野ノ別當定遍此事ヲ十
津河ヘ寄セントスル事ハ縦十萬騎ノ勢ア
リトモ不可叶其辺ノ郷民共ノ欲心ヲ勸
テ宮ヲ他所ヘ帯キ出シ奉ラント相計テ
道路ノ辻ニ札ヲ書テ立ケルハ大塔宮ヲ
奉討タテマシ者ニハ非職凡下ヲ不云伊勢
ノ車間庄ヲ恩賞ニ可被充行由関東ノ御
教昏在之其上ニ定遍先三日カ中ニ六萬
貫ヲ可与御内伺候ノ人御手ノ人ヲ討タ
ラン者ニハ五百貫降人ニ出タラン輩ニ

ハ三百貫何レモ其日ノ中ニ必沙汰シ與
ヘシト定テ奥ニ起請文ノ詞ヲ載テ嚴密
ノ法ヲソ出シケル
應永記云平井新从カ力ヲ押ヘテ申ケル
ハ入道殿御討死ノ上ハ順義ノ合戰ナラ
ハ不申及是ハ朝敵ノ事也何カハ可被苦
内々上意ヲ伺申可有御降参ト申ケレハ
新从非本意思ヒ今此際ニ成テ軍難義ニ
成ヌレハトテ降参セント云事ハ且ツハ
我家ノ瑕且ハ弓矢取ノ恥也トテ討死セ
シトシケル平井頻ニ宥メツヽ冑ヲ脱カ
セ降参シケレハ相従ケル者迚モ同ク降
人ニソ参ケル
親房卿被贈結城宗広云或為遁一旦之書、
為全所帯之利與同于高氏迷節忘名之輩
為数度之降人弓箭之恥何事如之

吉八十七、二ウ

江濃記云元亀弘治形部に毛利元就の六角方
六波羅と催侵す高宮山門の合戦すること
たること敵切物貫を奪馬場の峠に戦場と
なる東郡に隙へ条々れ之を身い出仕を止
れる長氏形切雑り名代として京都に差
上られ申候

二水記云永正十七年五月十日三好男光
第政川二郎孫四郎今日為降人及出頭云

云

太閤記云安宅河内守ら居城中良し城を八重
十重に打りこと弓鉄炮を射入打入凱歌おびき
一山海記云海て喧嘩者れい城中に女童
なと云云へ打ひ寄り安宅和り八中ら切り
とても運を開く屋敷を仮と唯降人と成て
信長公に幕下武切云る廊に人と合
思惟云云

奥羽永慶軍記云奥及赤坂合戦條義重飯陣ヲ玉
フ事赤坂カ至剛ノ振回ヲ惜マセ玉ヘテ
合戦ヲ止玉フサレハコソ義久カ計ヘニ
テ、赤坂父子遂ニ降人ト成テ永ク佐竹ノ
臣トソ成ニケル

預人

吾妻鏡云文治二年三月十六日諸國兵粮
米催事漸々被止之由被仰北條殿是及狼
籍之旨預所有訴之故也
又云建保元年二月十八日己丑囚人之中
園田七郎成朝遁出預人之家逐電今夜先
向于祈禱師僧号敬音坊談日来子細坊主勸
云今度叛逆衆皆不可破四張之網只今一
且雖遁出焉終難成安堵之思欲須遂出家
者成朝答云與力事者勿論中暑就中年来有
受領所望之志不達其前途者不可及除髪

云々廿日辛卯成朝逐電之間綷露顕被召
出件僧被尋問之処成朝申状之趣悉以言
上将軍家聞食之受領所望之志事還有御
感早尋出之可有恩赦云々
又云承久三年七月一日癸未合戦張本衆
公卿以下人々可断罪之由宣下間武州早
相具之可向下関東之旨下知面々預人
等云々

太平記云（十二ノ三ウ）公家一統妙法院宮ハ四國ノ勢
ヲ被召具讃岐國ヨリ御上洛アリ萬里小
路中納言藤房卿ハ預人小田民部大輔相
具メ常陸國ヨリ被上洛春宮大進季房ハ
配所ニテ身罷ニケレハ父宣房卿悦ノ中
ノ悲ミ老後ノ涙満神法勝寺円觀上人ヲ
ハ預人結城上野入道奉具足上洛シタリ
ケレハ云々

武蔵叢話ニ大久保相模守忠隣ハ山田原の城
主也如ハ其ハ新千載と云家康公ハ寵臣なり
対馬ニ大久保主殿助忠世なるもれハ一入
清ん安事一成しかいり成るもの慶長
十八年の冬家康公関東ニ在陣の砌十二月
六日中京ニて大久保相州彦右衛門一通ニ御状を以る芝右州隠謀の企ハ
ゝ事ハ事多依ハ書ニ仕候事

お話ゝ

落人

吾妻鏡建久元年二月五日下云凡於今度
落人等者至郎等皆可召進之落人相論共
就下人等事傍輩互不可有喧嘩
太平記云千鰍破城軍條去程ニ吉野戸津河字多
内郡ノ野伏共大塔宮ノ命ヲ含テ相集ル
事七千餘人此ノ峯彼ノ谷ニ立隠テ千鰍

破ノ寄手共ノ往来ノ路ヲ差塞依之諸國ノ兵ノ兵粮忽ニ尽テ人馬トモニ疲ケレハ轉漕ニ怠煩テ百騎二百騎引テ皈ル處ヲ、案内者ノ野伏トモ所々ノツマリツマリニ待受テ討留ケル間日々夜々ニ討ル者数ヲ知ス希有ニシテ命計ヲ助カル者ハ馬物具ヲ捨衣裳ヲ剥取レテ裸ナレハ或ハ破タル蓑ヲ身ヲ纏テ肩計ヲ隠シ或ハ草ノ葉ヲ腰ニ巻テ恥ヲアラハセル落人トモ毎日ニ引モ切ラス十方ヘ迯散前代未聞ノ恥辱也

又云（九ニ）越後守仲時已下自害條

糟谷三郎越後守ニ向テ申ケルハ弓矢取ノ可死處ニテ死セサレハ恥ヲ見ト申シ習ハシタルハ理ニテ候ケリ中略此等ヲ敵ニ受テハ退治セシ事恐クハ萬騎ノ勢ニテモ難叶況我等落人ノ

身ト成テ人馬共ニ疲レ矢ノ一筋ヲモハ
カ〻シク射候ヘキカモナク成テ候ヘ
ハ何ク迫カ落延候ヘキ云々

三百六十下、八ヲ
伊達日記云彼地ヲ御責可然候宮崎ヲハ
御引出御尤之由申上候内々御同心ニ被
思召候處ニ其夜城中ニ大事出来城ヲ持
ホコシ落城仕候落人トモカラヲ取参候
何レモ御成敗被成候佐沼ヘ御取ウツミ
被成候

愚耳旧聴記云小畠左近忠
重道盡系忠ヲ家取ヲ波岩よ
リの落人共大鳥迦山城打破津軽坂彩味油川
ヘ逃迯述

欠落人

甲陽軍鑑末書云今度降参ノ三河山家三
方衆モ山縣寄騎ニ被仰付也扨十一月中
旬ニ御馬入テルヽ家康人質松平源三郎

甲州下山ヨリ欠落ニヨリ明ル未ノ年ヨ
リ家康ト信玄公遠州三州アラソイノ弓
矢初ル也
増補家忠日記云天正十年七月十四日大
神君酒井左衛門尉忠次ニ信州十二郡ヲ
賜ル一信州十二郡揀別四分一其外諸役
等不入手出置候事一彼國引付候面々可
為其方計信州無一篇之間奉公令退屈欠
落候人分國可相拂國元内者上下共同前
之事
下手人
太平記云御所師直イヤヽヽ是セテノ仰
ヲ可承トハ不存只讒臣ノ申處ヲ御承引
候テ無故三條殿ヨリ師直カ一類亡サレ
トノ御結構ニテ候間其身ノ不誤処ヲ申
聞キ讒者ノ張本ヲ給テ後人ノ惡習ヲヨ

ラサン為ニ候トテ旗ノ手ヲ一同ニ颯ト下
サセ楯ヲ一面ニ進テ両殿ヲ圍奉リ御左
右遅シトソ責タリケル将軍弥腹ヲ居兼
テ累代ノ家人ニ被圍テ下手人ニ被乞出ス
例ヤアルヨシ〻〻天下ノ嘲ニ身ヲ晒テ
討死セントテ御小袖ト云鎧取テ被召ケ
レハ堂上堂下ニ集リタル兵甲ノ緒ヲシ
メ色メキ渡テアハヤ天下ノ安否ヨト肝
ヲ冷シケル

川立

譲信家記云 選虎公越中餐向條 柳崎ト云侍大将進
ミ出申ケルハ中略其勢千計上ノ瀬ヘ被遣
味方御本陣ノ始メ雲火迫皆消シ上ノ瀬
ニ雲火ヲ手ニ手ニタカセ諸軍上ノ瀬ヘ
皆向候体ヲ見セ其後川立ヲ三五人向ヘ
越候テ敵ニ横目ヲ付其相図ヲ以諸兵ヲ

御越被成尤存候

武家名目抄稿茂三十冊

明治十五年

同年五月四日再校并書　竹本正名

同年同月五日夜以旧校本一校加朱　塙忠韶

點了

明治十六年三月

校合　鈴木行一

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan